

第3回東日本大震災に関する活動助成 活動報告書

団体名	兵庫県介護支援専門員協会明石支部
活動テーマ	仮設住宅の被災者と支援者支援



目的・動機・活動の実施方法・成果

兵庫県介護支援専門員協会明石支部では、平成23年の東日本大震災直後より阪神淡路大震災の被災地であることを含め、津波で逃げ遅れた方々の大半が高齢者・障がい者であったこと、また、仮設住宅に入居しても新しい環境に馴染みにくい高齢者の特性をふまえ、何か支援できることがないかと活動を始めた。そして、傾聴を得意とするケアマネジャーの団体として仮設住宅の心のケアに向かったが、仮設住宅入居者も傷ついているが、その支援者はもっと疲弊していた。同じ被災者でありながら、自らを奮い立たせ、弱音を吐けない支援者にこそ支援が必要なのではないかと感じた。そこで、仮設住宅の支援と、被災者を支援している支援者の少しでも支援になればと活動を始めた。震災当初からの活動拠点の宮城県石巻市桃生、雄勝等で仮設住宅の定期訪問や地域包括支援センターや石巻市仮設雄勝診療所での活動を行ってきた。定期的に仮設住宅を訪問することによって、仮設住宅の住民からは「また、遠い明石から来てくれたか」「阪神淡路での復興の話聞かせてほしい」と待ち望む声を聞くことも増え、2年たった現在では、震災当初には話すことができなかった苦しい津波の現状であったり、生きづらさを聴くことも増えてきた。また、震災の混乱で疲弊していた地域包括支援センター等の支援者の狭間を埋めることができればと時間のかかる訪問を行うことで、入居者の硬膜下血腫の倒れる直前を発見したこともあった。また、同じ兵庫県明石市から無医村になった雄勝に支援に向かった小倉医師の活動に同郷の支援者としてともに活動が行えたことも意義深かった。震災後2年経つと被災地を訪れるボランティアの数は激減した。しかし、被災地の復興は遅々として進まず、反対に被災者の心の傷は深くなっている。心の回復にはそばにいてくれてそっと励ます人が必要である。しかし、いまの被災地にはその人も足りないと感じる。